「家と出来事 1971-2006 年の会話」

作　松田正隆

シーン設定　遠藤幹大、三上亮

１

未婚女性。キッチン。

午前１１時くらい

ウイスキーグラスで飲む麦茶

洗濯物を干した_後

タバコをふかしている

女「一つの結論が出るまでは、ずいぶん、時間がかかると思うのね。（大きな溜め息）……あ、それは大丈夫。私、そこはぬかりないほうだから。……ちゃんとしなきゃ。ちゃんと」

女「倒れるなら、後ろに向きに倒れないで、前に向かって倒れろって言う人いるのね。（大きな溜め息）……あ、それは大丈夫。私、大真面目に真ん中歩けるタイプだから。……でもね、比喩だとはわかっていても、倒れ方のイメージって、なかなかつかめないし、前に向かって倒れたほうが痛いっていうか……」

女「いやだ。また、忘れちゃった。（大きな溜め息）どこかに、私の忘れ物置き場がないかしら」

女「同じ形の空はないって言うけれど、本当に好きだった人が死んだとき、悲しくても空を見上げればその日の空の形が瞼に残るって誰かが私に教えてくれた。（大きな溜め息）一日一日、雲の一つ一つが流れては消えて行くけど、晴れの日も雨の日も、それは誰かの死んだ日の空の形なのよ。」

2

叔母と姪。キッチン

夏の日、午後13~15時くらい

コーヒー豆の選別、質の悪い豆を取り除く。ほうじ茶を煎るような網で焙煎をする

叔母と姪の会話から母（妹）の相談をしているらしい

姪「……学部出て、私が院に行くって、言い出したときから、そうだったような気がする」

叔母「そう。ずいぶん、前じゃない」

姪「期待と嫉妬が、混じり合ってて、もう、それがどっちの状態にあるのか、いまのその気持ちがどういう理由で始まって、私がなんで責められているのか、わからないっていうか」

叔母「ああ」

姪「……、お母さん、それがもう手段だって、思ってるのね。自分をどんどん興奮状態に追い込んで、なんかいつのまにか、被害者っぽくするっていうか」

叔母「やっかいね」

姪「そう、そうなの」

叔母「まあ、まえから、そんなとこあったから」

姪「叔母さんはそれでいいかもしれないけど、娘としては困るのよ」

叔母「そうか。人生の後半って長いもんね」

姪「ええ？ああ、まあねえ」

叔母「私、なんか、おなか出て来ちゃって」

姪「え。そんなことないよ」

3

女性。掃除機をかける。古い型の掃除機でよく詰まる。

何かと思って見てみると子供の頃に好きだったキャラクターのキーホルダー。

数日前に遊びに来ていた親戚の（友人の）子供の忘れ物かもしれなかった。

女「あ。……洋介くんのかな」

4

初老の男性が庭の草むしり。

最中に家のベランダから奥さんから声をかけられる。

女「コーヒー」

男「うん」

リビング。男、来て、コーヒーを飲む。

男「……明彦が、大学の友達連れて来て大変だったよ」

女「え、また」

男「昼には、いなくなってた。……でも、蒲団もちゃんとたたんでてさ」

女「へー」

男「５人くらいいたかな」

女「そんなに」

男「でも、あいつら、きちんとしてるんだ。ここでウイスキー飲んでたら、こんばんわって」

女「文彦のときは、どうだったの」

男「ああ、あいつは駄目だ。ぐちゃぐちゃ。……蒲団がさ、こう、かまくらみたいになってて」

女「あ、そう」

5

ラジオが定期的に流れる（リアルタイム）

例えば、天気予報、渋滞情報、ニュースなど

本物の放送に混ぜて、フェイクの情報が流れる

「次は道路交通情報です。街は、おおむね良好な交通状態と言えます。次は、世界のお天気。ロシア、北東部は氷に覆われ、寒い夜となるでしょう。南米の密林に流れ星が落ちました。田舎のほうのお天気。晴れ。都会のお天気。くもり。」

「今日は、夕方の街で街頭インタビューをしました」

繁華街の路地。群衆。

夕方の街。

「あ、いいですよ。名前ですか、井上由紀子と、言います。そこのカフェで、働いてます。三十二歳、独身です。え、なにを喋ればいいんですか。特に、なにも言うことなんてないです。……私の、高校の頃の友人が死にました。癌を患ってました。まったく知りませんでした。ほんと、びっくりして。ずいぶん会ってなかったし。彼女の笑顔がたくさん浮かんで来て、涙が止まらなくなりました。でも、しばらくして、そのときの彼女は、私のなかにあるあのときの笑顔の彼女は、この死のことを、自分がこうして死ぬということを知らないんだなって思いました。そしたら、泣けなくなりました。もうそのようにしか彼女のことを思い出せないことが、なんて言うか、切ないというか、いえ、どちらかというと、腹立たしいんです。あのころの彼女に、いまの彼女のことを貼付けてしまう自分が嫌で嫌でなりません」

「では、ここで音楽を一曲。中島みゆきで、時刻表」

中島みゆきの曲。

「こんな時間になっても、家路を急ぐ人たちが見えます。これから、ビルの明かりも徐々に消えていくのでしょうけれど、まだ、いくつか、光が灯っています。この時間にこうやってしゃべっているのが好きだなって私が思うのは、このスタジオからのこの眺めが好きなのかもしれませんね。ああ、そうそう。ここから見える風景で、いつも気になるヘアサロンがあるんですけど、今でも、電気点いていて、ああ、夜中まで、やってるのかなってずっと思ってたんだけど、あ、いま、最終電車が行きます。いつだったか、あれは、お店の人が練習してるんじゃないかなって、スタッフが教えてくれて、あ、そうか、じゃ、まだキャリアの浅い店員さんが、お客役の人と練習する人になって、かわりばんこに店長さんや先輩のいないすきに練習しているんだろうなって。これはもう、勝手な私の思い込みです。ああ、そうです。今も見えます。今夜も、女の人が女の人の髪を切っています。顔までは見えません。私が、今、見ている風景はみなさんに届いているんでしょうか。当然、この見えたままが伝わっているとは思えませんが。私の話す言葉から、正確なイメージが浮かぶといいですね。そういえば、今日、夕方、交通事故を見ました。車が、男の人と交差点でぶつかったんです。ぶつかられたほうの男の人は車道に倒れてました。車を運転していた人はその近くで、ただ呆然と立ってました。私はしばらく見ていました。打ち合わせがあったので、しばらくしたら、その場を立ち去りました。いや、でも、なんか、ずいぶん、いたとも思うんだけど。時計を見たわけじゃないので。どのくらい、そこにいたんだろう。ただ、救急車は、来ませんでした。あの人はどうなったんでしょうか。ああ、確か、近くに誰かいたんです。なんでしょうか、なんで、私、こんなことしゃべるんでしょうか。それで、その人となにか、しゃべりました。どうでもいいような、話でした。幼い頃、母と一緒にやっぱり事故を見たのを思い出しました。あの時は、バイクに乗っている人が倒れていたのでした。かすかに、からだが動いてました。動かそうとして動いてない動きでした。自分の意志とは関係なく、動くのは、からだの一部でした。それが、どこだったのか。腕か、足か、いや、指とか、だったのかもしれません。覚えてないんです。なにか、かすかに動いているのはわかるのに、それが、目に見える光景として、瞼に浮かばないのです。母の息遣いが聞こえていました。いや、気配でしょうか。ふるえるような。いや、怖いっていうような声を出したのかもしれません。今日のお昼間の、あのときも、そして、幼い頃の、あのときも、今、あそこに見えるヘアサロンの光景のように確かに見えていたはずなのに。自分のなかの記憶となると、取り出すのに苦労しますね。さっき今日の事故現場で誰かがいたと言いました。その人といるとき、香水の匂いがした、そのときしたのかはわからないけど、胸の疼きのように、匂いがあとから来るのが恋の始まりなんです。そのときは、匂いも一緒にありましたがわからないだけなんです。それに、なんというか、包まれるようにやってくる。夕暮れのように。包まれる。気配に。時間が刻々と過ぎ去るのがそのときはわからないのに、ちょと、目をはなしたすきに時刻は過ぎ去っています。ドライバーのみなさん、安全運転に気をつけて。リスナーのみなさん、私の話を聞いて思い浮かべた光景の間のぶん、時刻は過ぎ去っているのでしょうか。きっと、匂いなんてなかったはずなのに。時間差があって、

そのときは必死でわからないのが、恋愛なんです。そうです、私は恋をしました。まったく自分には関わりのない香りだけど、悪くないな、と、思えたのですから」

「また、私にはなにか、新しい恋の予感があります。どきどきしてます。それはでも、もう過去のはなしですけどね。でも恋の予感がありますって言うと、いま、まさに、そんな気分になるから不思議です。もう今日でこの番組も終わりです。もうすぐ、きっと、ひどいことが起きるんです。私たちには想像のつかない世界の終りがやってきます。私は田舎の道を歩いておりました。そこは、私の故郷のような気もします。私は、この街で生まれ育ちましたから、故郷はないのですが、それでもそこは私の故郷の感じがしました。漁港です。男の人と港で会いました。胸がときめいて、彼に電話番号を聞いて、その場で別れたあと、すぐに電話しましたが、彼は出ませんでした。どこ行ったんだろうと、思わせぶりに去っていった彼の面影を抱きながら、田舎道を歩きました。すると、気づきました。お弔いが多いのです。お弔いが実に多い。お弔いが実に多い村。いえ、お弔いが実に多い漁村でした。お弔いの町です。あるところでは、軽自動車を簡単な非常用設備で救急車にしたような車の中で、救急病院に搬送される人の顔が見えました。ああ、この人もう駄目かなって思いました。するとやっぱり、それはもう死んだのだからと言わんばかりに道に人々が、その人の親戚や家の人だったんでしょうね、道に人々が出て来て、なにか、札を、忌中の札を道ばたにはっつけ回ってました。私はなぜか、局の上司にランチをごちそうになって、案の定、最後のお金の払い時にお金を払おうとするので、それに呼吸をあわせて、ありがとうと言いました。支払いの際の私の仕草はしっかり、私がお金を支払うそぶりでした。そのそぶりをしたのに、です。上司は、ああ、いい、ここはおれが出すと言いました。当然そういうことになります。なると思いましたが、実際そういうことになるとわりと後ろ暗い気分になって気が滅入りました。上司がさよならを言って、道の向こうへ去るあいだじゅう、遠くなるまで、卑屈なお辞儀をしていました。私は、それでも、ちゃんと彼と再び会う約束はしていて、なんというか、からだは甘い気分で包まれてましたね。そのときは。言葉になかなかできませんが。電話を繰り返すんですが、まったくかかりません。リダイヤル、リダイヤルしてもかからないな、と思ってたら、やっと出ました。でも、それはどこかのお弔いのお宅で、すまん、今はかんべんしてくれないか、と言われました。あっ、と思い、間違えてリダイヤル、それからまたリダイヤルしてたんだと咄嗟に顔から火が出ました。あ、すみません、と応え、ずっと、この電話は鳴りっぱなしでしたか？と尋ねると、うん、でも、もう、ほんとうにかんべんしてくれないか、なんとも、からだにこたえてでられなんだのだ、と言われてしまいました。いまいましいなって思いました。どうして、彼にかけた電話が、お弔いのお宅だったのか、残念でなりません。また、私は興奮を隠すことができず、彼に今度は慎重に、間違えないように電話しました。あ、そうか、私はそもそも彼の電話番号は把握しておらず、その分、私のほうから、私の母の電話番号をここにかけて来いと言わんばかりに告げ知らせたのですから。それでいいではないか、母だ母だと思い、母に電話をかけました。だけどもどういうわ

けか母は電話に出ずじまいで、ああ、母のところに彼からとても貴重な電話があったとしても、母こそが、私の電話番号をしらないんだと思って、がっかりしました。私は落ち着くためにも、ある建物の前の腰掛けに座って、そこから、彼に直で連絡する方法を探しました。なんでもいいからこの恋心さえとどけばいいのですから。なんかないか、なんかないかと思いました。ふと、見ると町の物産館が見えました。それにともなって、私のすわった腰掛けが、昔からなにかある度ごとにいつもうまく行かない腰掛けじゃないかと思い、場所をかえようと立ち、町の物産館のほうへ歩みをすすめることにしました。早足にだんだんなっても足取りは重かったです。でもそれが、うまく行かない腰掛けと思うほどにこの町のことを知っているとも思えず、変わりに、思い出のような分泌液にとうとう私もやられたんだと観念しました」

6

奥さんがばたばたと廊下を走る足音。

応接室で本を読んでいた旦那。

何かと思ったら猫が家に勝手に入ってきていた。

奥さん「ちょっと、ねこ、猫」

旦那「……ああ、そいつ、よく、来るやつだ」

奥さん「そっち、行ったんじゃない」

旦那「ええ。いないよ、こっちには」

7

どんぐりが玄関の門の上に並べて置かれている。

家に入って台所のお勝手口から出るとエアコンの室外機の上にも置かれていた。

男「あれ、誰だよ。こんなところにどんぐり並べたの」

8

新幹線にまつわるニュース、テレビから流れる。

弟「新幹線の歌って知ってる」

兄「知らない」

弟「ビュワーン　ビュワーン　走る　青いひかりの超特急　時速２５０キロ　すべるようだな　走る　ビュワーン　ビュワーン　ビュワーン　走る
ビュワーン　ビュワーン　走る　まるいひかりの　ボンネット　時速２５０キロ　とんでくようだな　走る　ビュワーン　ビュワーン　ビュワーン　走る」

9

男性（一人暮らし）　夜中の来訪者。

仕事が終わって２２時頃帰宅したら、だれかが呼び鈴を鳴らす。

それが仕事関係の取材の記者であることは分かっている。

帰宅して家に明かりがついたことで帰っていたということが分かったらしい。

わずらわしいと思っている。そのまま、居留守をつかう。

10

次の日また訪ねて来た記者。きょうは家に入れてしまう。

「何も話すことはない」「悪いけど僕は一人で飲ませてもらうよ」と日本酒を飲む。

なし崩し的にその記者も飲ませて、帰りに土産として残った日本酒をもたせて帰らせる。

玄関先でビンが割れる音が聞こえた。

11

夏の日の朝。

男、庭で椅子に座りながら寝てしまっている。

朝、訪ねてきた息子（娘）に起こされる。

娘「お父さん。え、寝てるの。……お父さん！」

息子「起こさなくってもいいだろ」

娘「わ、冷蔵庫の中、なんにもない」

息子「ビールない？」

娘「ない。なんか買ってこようか」

娘「お父さん、そんなとこで寝たら、熱中症になるよ」

息子「おれ、ちょっと煙草買って来る」

娘「あ、じゃ、ポカリスウェット買って来て」

12

しりとりをする小さい子と大人

「まばたき」「きつね」「ねぎ」「ぎんこう」「うすぎ」「ぎときばっかり、、」のような

13

夜、死んだはずの父親が、息子に現れ語りかける。

父「和彦。和彦。……おい、和彦」

息子「あ、お、お父さん」

父「たとえば、世界のあらゆる都市にあふれかえるサイン。喧噪の巷に浮き上がる看板の文字と電光掲示板。群衆の視線の届かぬ場所にさえ、企業広告はあり、それを一旦切り離し、再び、張り合わせれば、誘拐犯がつくる脅迫文のように世界のあらゆる死者の名前が作文できるのではないかとおれは考えたのだ」

息子「お願いだ。もう、あっちに行ってくれよ」

14

台風の日は決まって、気のふれた息子が叫び出す。

息子「誰か僕を呼ぶ声がする！深い夜の海の底からー！あああああ」

母「あなた、あなた」

父「うん？」

母「義彦がまた叫んでます」

父「ほっとけ。台風が来るんだ」

母「そんな。……ご近所が、目を覚ましますよ」

父「バカ。おれが目を覚ましたじゃないか」

息子「僕を連れて行く気かあ！この僕をォ。ああああ。こんなに正しい僕をォ！」

母「あなた、あなた」

父「うるさい。明日、早いんだ」

15

小説家。書斎で、書き物をしている。その内容は以下の通り、

「家」

池の波紋を見つめながら、少女が、「これは私たちの家ね」と言う。『シベールの日曜日』という映画のせりふである。親に捨てられた少女と戦争で記憶を失った男の交流を描いた作品である。冬の公園の池の水面が、二人の顔をうつし、ゆるやかに波紋の中でそれをゆらす。とても美しいシーンで、波紋を「家」と言う、少女の言葉に驚かされる。

強い雨が降ったりすると、家に住んでいられることが幸いなことであると実感する。私は傘を持って出掛けるのが苦手で、ほとんど雨の日に傘を持って行くことをしないが、実際強い雨に降られたりすると、やはり傘を持って出ていればと後悔する。そんなときによく思いおこすのが『シベールの日曜日』の少女のことで、雨が私の家ねと思えたらどんなにいいだろうと思うのである。

そういえば、黒澤明の映画『素晴らしき日曜日』でも、若い二人の男女が、雨の中、まだ焼け跡の残る東京の街をさまよっていた。まだ二人には家がないのである。二人だけのくつろげる場所を持っていない。それ故に、二人は世間の人々のまなざしにさらされていた。何よりも、観客という視線に。女性の主人公は、カメラ目線で語りかける。私たちを助けてくださいと。二人は見られるだけの存在であることをやめたのである。そのとき、彼女の顔が画面にあらわになる。それを見ている私は居心地が悪くなる。傍観者でいられなくなるのだ。

この世界に生まれ、この世界で生きるということは、この世界に住むということだ。住むには、住まい、家を見つけねばならない。よく雨露をしのげる家さえあれば、と言うが、この二つの映画の登場人物たちが池の波紋や雨をすみかとしたときに、たとえ、ずぶ濡れになったとしても、本人たちがそう思えるのなら、それは彼らにとっての「家」なのであろう。しかし、その「家」は世間からのまなざしを防ぐことができないのである。この世界に住まいがないということは、まなざしにさらされることである。顔があらわになるということは、その顔の持ち主を視線から守る住まいが失われるということなのだろう。

『シベールの日曜日』の男は少女との特殊な関係を誤解され、警官に殺されるが、世間のまなざしが殺したに等しい。その男にだけ教えた少女の本当の名前「シベール」は男の死とともに消えてしまう。教会に引き取られていた彼女は「フランソワーズ」と名づけられていた。「シベール」と呼ぶ者が誰もいなくなり、警官に名前は何かと問われ、「もう誰でもなくなったのよ」とこたえる。「家」と名前を失った少女の顔は画面の中で私たちをまなざし返すこともできず、ただ途方に暮れていた。

たまにいきずまりベランダにタバコを吸いに出る。電車が走っている。

１Fの電話がなる。いつもは妻が電話をとる。が、その日は一向に電話にでない。

しかたなく、たばこを捨て、1Fに向かい電話をとる。

小説家「はい。はい。そうです。ああ、ちょっと、いま、出てるみたいで。あ、はい。ちょっと、私じゃわかりませんので、はい、帰って来たら伝えます。はい。はい。それじゃ」

16

主婦。出会い系サイトで出会った、若い青年との関わり。

青年「おれはおまえの秘密だろ。」

主婦「秘密というより、恥部ね、恥部」

青年「恥部か。じゃ、恥部でもいい」

主婦「いいのか。いいんだ」

青年「だって、そうじゃないか、秘密がばれて、恥ずかしくないのは秘密じゃないだろ。言い方をかえれば、秘密は恥部になる。というか、恥部こそが秘密だ」

主婦「なにが言いたいの」

青年はビニール袋を、鞄から取り出す

主婦「なに、それ」

青年「ビニール袋」

主婦「どうするの」

青年「被るんだ」

主婦「変態」

青年「もしおれが旦那さんの腹を刺すようなことになったとき、きっと、旦那さんは驚くよ。だって、旦那さんはあんたにおれのようなヤツが、まとわりついているなんて思ってなかったろうし、ましてや、話がこじれるにしたって、いきなり腹を刺されるなんて思いもしなかっただろうから。びっくりするよ」

主婦「私、悪い予感がする」

青年「そうそう、そういうせりふを言ってくれ。悪い予感、いいよ。」

主婦「あなたは何を恐れているの？」

青年「恐れている、おれが？」

主婦「ものごとが予定通りに進むこと？」

青年「恐れていることなんて何もない。」

主婦「ナイフがあるから？」

青年「ナイフの力と釣り合うだけの力がおれにはあるから」

主婦「先に驚かす自分を想像して、あの人におとずれる不運を先取りして、ほくそ笑んでるだけじゃない。そんなの卑劣だわ」

青年「つまり、こういうことか。世の中は、すべて思い通りに行くわけがないってことを、おれは旦那さんに思い知らせるべくここに来た。けれど、思い通りにならないってことを思い知らせるおれは、旦那さんにとって思い通りにならない

ことを、すでに、おれの意志でつくろうとしているわけだから、旦那さんの運命をもてあそんでる分だけ、旦那さんの優位に立っているってことだろ。それを、あんたは卑劣だと思ったのか」

主婦「そうよ。神さまにでもなったつもりでいるんだろうけど」

青年「人間が神さまになれるはずないじゃないか」

主婦「そんなステレオタイプな自覚だけはあるっていうのに、どうしてあなたはそんなに上から目線なのかしら。ほんとうは弱いのに、ナイフ持ち出したり、えらそうに振る舞ったりするチンピラのような人とどう違うっていうのかしら」

青年「それならどうしておれをここに連れて来た」

主婦「自分のこと、棚に上げて何でも人のせいにするのはよしてよ」

青年「答えろ。どうしておれはこんなところにいる。おれはあんたの秘密のままでよかった」

17

庭に向かって開かれた窓。

誰かの声が聞こえたような……。

夫「え、何か言った？　……薔薇、今年、やっとだよ。こんなに咲いたの。今年の梅雨は雨降らないから。……紫陽花、もうじきだよ。この二三日うちかな。……本当だって。咲くよ。決まってるじゃないか。去年だって咲いたんだ。……色は青、土が酸性だと青なんだ。アルカリ性だと赤。……過リン酸石灰を土に混ぜると青になるんだ。……春には、春の花。夏には夏の花。秋には秋の花、冬には冬の花。花ざかりさ。一年中。……、冬にだって咲くよ。シンビジュームとか、白檀とか……」

妻「……ねえ。あなたはいったい、誰にむかって話しかけてるの？……誰の言葉を聞いているの？」

妻「あの町も、西日のきつい町だったわ。世の中が夜になっても、あの町はいつも夕暮れの中にとり残されていた。いつまでたっても夕方のままの港。灰色の住宅の壁。灰色の細長い道。その先に、ただ海だけが、キラキラとうねって西日に映えていた」

妻「……あなたが、そうやって、ぼんやり黙ってしまうのが、私、どんなに恐かったか、わかる？……なにかを言わないようにして、言ってもいいことだけを私にしゃべり、黙ってぼんやりしているときに、その言わないでおこうとしていたことを、あなたは、ひとりひそかにかみしめているんじゃないかと……恐かったの」

夫「スィートピー。ペチュニア。ゼニアオイ。サルビア。あんまり目立たん花だが、スモークツリーってのもある。俺はこれ、けっこう気に入ってるんだけど……。他にはランタナ、ダリア、インパチェンス、オランダの改良種のアルストロメリア。これなんかどうだい、デルフィニウム、ギリシャのことばのデルピニオンから来ててね、イルカっていう意味なんだ」

18

二階のベランダ。

妻「ここから、飛行船を見たことがあったんですよ。そのときね、あの人もまだ元気で、こんなことになるなんて思ってなかったし、人は死んだらどうなるのって聞いたんです。浮かんでる飛行船にはなにかの宣伝文が書かれていて、止まっているのか動いているのわからなくて、あの人がその宣伝文句を読んで、そのとき、そんなはずはないと思いながらも、それがそのときの答えだと思った。死んだら、企業の広告文になる。……その言葉には、そのとき妙な説得力があったのに。今では、なんか、やっぱり、そんなことじゃないようにも思うんです」

19

娘と母の会話。

父は居間で離れて聞いていた

どうやら浮き輪がどこにあるのか尋ねているらしい。

娘「浮き袋、あったでしょ」

母「それ、いつの話し？」

娘「去年、おばあちゃんの家に行ったとき」

母「ああ、イルカのやつ？」

娘「あれは、だから洋介くんの借りてたんだって。うちのがあったでしょ。水玉の赤いやつ、浮き輪よ浮き輪」

母「え、そうなの」

娘「もう、どこ？」

母「ちょっと、待って、ここにあると思うから」

母、玄関の物置を探す。

母「これなら、あるんだけど」

娘「それ水中眼鏡じゃない」

母「うん」

娘「もー」

母「あんたも探しなさいよ」

母、娘、探す。

20

猫の鳴き声

昔飼っていた猫の鳴き声が聞こえた気がした。

姿は見えない。

庭のプランターの家庭菜園のキュウリの葉っぱが視界の端で揺れている

猫が動いたのかと錯覚してしまった。

そのことを妻に伝えると「私もよくその葉っぱで猫と見間違えてしまう」と言う。

また猫の鳴き声がした（気がした）

夫「いま、チャオの声がしなかったか」

妻「ええ？ まさか」

21

家族旅行からの帰り。父、母、姉、兄、弟。

家族で一旦荷物を置く。一番上の姉はすぐに一人暮らしのアパートに帰る。

長男も一人暮らししているが、面倒なので今日は泊まる。

弟は兄が泊まるのが好きではない。

自分の領土を侵された気になる。

外で車の音。ドアのあく音、閉まる音。家族の帰宅。

父「ひとまず、上がって」

母「クーラーつけて」

長男「のどかわいた」

母「麦茶あるでしょ、冷蔵庫。大丈夫だと思うから」

弟「暑い」

父「おい、これ、こんなとこ置いといたらだめじゃないか」

姉「私、上がっちゃったら、もう動けなくなるから、このまま帰る」

父「ええ、あ、そう」

姉「うん」

母「お茶くらい飲んでったら」

姉「いいわよ、もう。歩いてそこだから」

父「気をつけてな」

姉「はい。まだ、明るいから」

弟「あ、姉さん」

姉「うん？」

弟「これ、お土産、箱根の」

姉「ああ、ありがと。じゃあね」

リビングで落ち着く。

父「おれにも、麦茶くれよ」

母「ああ。」

麦茶をコップに入れる母。

父、飲む。

父「……なんか、風が強いな」

母「台風、来るってよ」

父「え、あ、そう」

弟「兄さん、今日、泊まるの」

長男「うん」

弟「タオルケット、一枚しかないけど」

長男「いいよ。おまえ使えよ」

父「毛布じゃ暑いか」

22

キジの剥製の贈り物。

息子「え、これなに」

父「ああ。山本さんが置いてったんだよ」

息子「へー」

息子「キジ？」

父「ええ？ なんか言ったか？」（と、遠くで）

息子「これ、なに、キジ？」

父「キジかな」

23

父と息子二人。映画を観ている。

父「お前もそろそろ、こういう映画の良さが分かるんじゃないか？」

息子「日活ロマンポルノって見たことある？」

父「見たことない」

息子「けっこう、名作あるんだよ」

24

父と息子。

父「おまえまた焼き鳥買って来たのか」

息子「もらったんだよ」

父「焼き鳥屋の親父にか」

息子「うん」

25

夏休み。

高校生の息子が泊まりに来ている。

父「昔、ある村でな、まったく、記録を残さなかった靴職人がいたそうだ。……どう思う」

息子「どうって」

父「歴史的にどうだと思う」

息子「……靴職人なんだろ」

父「靴職人だ」

息子「記録があるじゃないか」

父「その人が、靴職人であることは確かなんだ」

息子「あ、そう」

父「カレー食べた？」

息子「え。ああ、食べた。おいしかった」

息子「あ、そうだ。夜中、パターの練習すんのやめてよ」

父「してないよ」

息子「してたよ」

父「いつ。」

息子「昨日の夜中」

父「何時ころ」

息子「二時くらい」

父「するわけないだろ」

息子「いや、してたって」

父「してない」

息子「え。聞こえたけど」

父「そんなの、上で聞こえるか」

息子「聞こえるよ。だって聞こえたから」

父「おれじゃないよ」

息子「え。じゃ、誰。変なこと言わないでよ」

しばらくして、息子、リビングでパター練習用のマットでパターを打ってみる。

コン。と音がする。

息子「あ。これ、ね、この音」

父「え。」

息子「だから、この音」

コン。

父「そんなの聞こえないって」

息子「いや、聞こえたって。聞こえたから言ってるんだから」

父「聞こえないよ、そのくらいの音じゃ」

息子「じゃ、してたんでしょ、練習」

父「だから、夜中になんかしないって」

息子「え。え、じゃ、なんなの、昨日の」

父「なんなのって。夢見たんだよ」

息子「え、夢？夢じゃないって」

コン。

息子「この音。ね、（打つ、コン）これが上で聞こえたんだから」

息子「聞いてみてよ。上で、ちょっと聞いてみて」

父「え」

息子「ちょっとだけ、ね、ここで鳴らすから」

父「え、いいよ」

息子「お願いだから」

父「でも、それが聞こえる聞こえないって話じゃないだろ」

息子「そうだけど。ま、いいからさ」

父、二階に上がる。

息子「いい？、いくよ。いい？……お父さん！」

父「いいぞ」

コン。

息子「聞こえた？」

父「聞こえない」

息子「うそでしょ」

コン。

息子「……、え。……どう？」

父「聞こえないよ」

息子「え、なんで？ 床に耳つけてる？」

父「うん」

コン。

息子「聞こえたでしょ」

息子「ねえ。聞こえたでしょ？」

父、降りて来て、

父「聞こえないよ」

息子、二階に上がる。

息子「やってみて！」

父、パターを打つ、ゴルボールが走る。

コン。

息子「聞こえた。それそれ、それが聞こえたんだよ」

コン。

息子「そうそう、それそれ」

父、笑っている。

コン。コン。コン。

26

食事をしながらテレビ番組を見る母と子。

母「プール、始まった？」

息子「うん、先週から」

母「あ、そう、よく運動してから、はいんなきゃ」

息子「ああ、準備運動するから大丈夫」

母「足とか、筋肉とかつるでしょ、運動しなきゃ」

息子「うん。大丈夫だって」

息子「足とか筋肉とかっておかしいでしょ」

母「え？」

息子「足の筋肉とか手の筋肉とかでしょ、それ言うなら」

母「どういうこと？」

息子「もういい」

母「この肉じゃが、おいしいでしょ」

息子「うん。どしたの、つくったの」

母「買って来た」

息子「なんだよ」

母「え、どうして、買って来たらだめなの」

息子「いや、おいしいって聞くから、つくったのかと思った」

母「お父さんには、つくったって言っちゃった」

息子「え、うそついたの」

母「うん」

息子「え、なんで」

母「なんでだろ、なんでかな、なりゆき？　流れで、ついつい、つくったって言っちゃった。まずいかな」

息子「いや、まずいっていうか」

母「なんか、家でつくったみたいな味するでしょ、この肉じゃが」

息子「ああ。そうなの？」

母「お父さんにつくったのって、言われたとき、そう、つくったのって言ったのね。ごく、自然に、そう言ったんだけど。いま、しんちゃんが、つくったのって言ったときは、うそは言えなかったのよ。……買ってきたって素直に言えた」

息子「……とにかく、おいしいよ」

母「なぜだと思う？」

母「お父さんね、買って来たって言ったら、悲しい顔するのよ。それがどんなにおいしいものでも、私がつくったもののほうがうれしいのよ。買ったものよりまずくても、私がつくらなきゃ、嫌な顔するの」

母「あ、お茶、あるわよ」

27

こたつと新幹線。

初老の男性。部屋が余るほどの家。一部屋だけこたつを置いた。

外のベランダから北へ行く新幹線が眺められる。

冬の澄んだ空気の朝にはそこから富士山を見ることができる。

茶をすする。初老の男。

「なあ、おまえ、ここからは、晴れた日に、富士山が見える。……冬の晴れた日にはな。それからな、新幹線が通るのも見えるよ。今日はいい天気だ。……東京には山がない。ここからもそんなには見えないけれど。晴れた日には、富士山が見える」

28

引っ越すために家の荷物の整理をしていると娘が小さいころに遊んでいたトイピアノを発見する。

「ネコふんじゃった」を弾いてみた。当時の娘とのこと（会話）を思い出した。

トイピアノの「ネコふんじゃった」

夫「それ、もう捨てたら。章子だっていらないって言うよ」

妻「そうね。……静岡にいたときのじゃないかな」

夫「結構、こっち来るとき捨てたのにな」

トイピアノの「ネコふんじゃった」

29

台風の翌日。ベランダ、掃除をしている父と息子

父「あ、蒲団、干しとけよ。今日は乾くから」

息子「うん」

父「学校のプール掃除を思い出すよ」

息子「あとで、車貸してよ。使う？」

父「いいけど。」

息子「ありがとう」

父「灰皿、使うなよ」

息子「うん」

30

切れかけの階段の電球が明滅している。

妻「階段の電球切れてる」

妻、玄関の物置で電球を探す。

夫「脚立、いるだろう。……おれやろうか。」

妻「あ、うん。」

夫、電球を代える。

妻「そこから、章子、落ちたの覚えてる？」

夫「え、そうだっけ」

妻「救急車呼んだじゃない」

夫「覚えてない」

妻「え、なんで、あなたいたわよ」

夫「ええ、あ、そう、そんなことあった」

妻「まだ、幼稚園行ってなかった」

妻「思いのほか泣かないし、ぼーっとしてるし、どっか変なとこ打ってるんじゃないかって、あなたが言ったのよ」

夫「落ちたのさえ、覚えてないって」

妻「ええ。じゃ。あれ、誰だったのかな。お父さんかな」

夫「ああ、親父が来てたんじゃないかな」

妻「ああ、そうかな。」

夫「とくに大したことなかったじゃないか」

妻「そうね、そうだったけど。あたし、ほんとびっくりして……」

妻「あ、点いた」

妻「ちょっと、明るいね」

夫「うん」

妻「明るすぎない？」

夫「まあね」

妻「いっか」

31

初老男性、テレビをつけっぱなしで寝てしまっていた

夜中のテレビ、能を海外に紹介するようなビデオが流れている。

朝起きてから「異界への道」という単語が寝ぼけながらやたらと印象に残った。

32

バラの生垣が見事な隣の家。

男「隣の家は、薔薇の生け垣が見事だな」

男「自然に放っておいてはきれいな花は咲かないものだ」

男「あえて剪定することで次の花に繋げてあげる。そうすることで人が美しいと思う花が咲く」

33

テレビから流れる映画。「グランドホテル」

息子「これなんて映画？」

父「古い映画だよ」

父「……この映画をみんなまねしたんだ」

息子「この映画のなにをまねするの」

父「……洗いものすんだのか」

父が洗い物を始める。

息子「置いといて、あとでやるから」

34

寝室。

夫「……うん？　地震！」

妻「あ、」

夫「テレビつけて」

妻「……なにも、やってないけど」

夫「震度、３くらいかな」

夫「……慎司は寝てたな」

妻「え？」

夫「あの、震災があったとき」

妻「あの子、あなたみたいに敏感じゃないから」

夫「大物だよ」

妻、笑う。

夫「章子は、叫んでた。助けてーって」

妻「あ、そう」

夫「覚えてないの」

妻「覚えてない」

夫「とくに、たいしたことはなかったはずなんだ」

妻「そうよね」

夫「一段落して、みんなで一緒にテレビ見てたとき章子もいたのを覚えている」

夫「……あいつはなにを助けてほしかったんだ」

妻「びっくりしたのよ、きっと」

夫「でも、あれは、尋常な叫び声じゃなかった。この世の底からの叫びだった」

35

また、違う夜の寝室。

夫「あ、雨だ」

妻「……なに、起きてたの」

夫「洗濯物、大丈夫か」

妻「夜に干してるわけないでしょ」

夫「よく母さんに言われたよ。……姉さんは、降る前に取り込む、兄貴は降ったら取り込む、おれは」

妻「降っても、取り込まない」

36

いつかの8月9日、午前11時2分。長崎。

テレビからは長崎市長の平和宣言。生徒たちの合唱。

息子「去年は、姉さんもいたよ」

父「ああ。……なんか、仕事でこっち来てて」

息子「そうめん食べたよ」

父「そうそう。庭で流しそうめんした！」

息子「してないよ」

息子「いつの話しだよそれ」

37

皆既日食の日。

夫婦の会話。

妻「あら、おかえりなさい」

夫「うん」

妻「帰ってたの。気づかなかった」

妻「どうしたの」

夫「いや。どうもしないけど」

妻「今日、日食だったでしょ」

夫「うん」

妻「皆既日食。見た？」

夫「見ないよ」

妻「なに、それ」

夫「ああ、これ」

妻「あ、洗濯バサミ、なんで」

夫「ポケットにあってさ」

妻「へー」

妻「なんで」

夫「ソファーの下にあったよ」

妻「拾ったの」

夫「そうそう」

夫「洗濯バサミって、足りなかったりするの」

妻「とくに足りなかったりしないけど」

妻「いつ」

夫「え」

妻「拾ったの、いつなの」

夫「よく覚えてない。なんか、さっきポケット手いれたら出てきて」

妻「ああ。なるほど」

夫「数えたりするの？」

妻「え、ま、だいたいだけど。そんな、ちゃんとは数えてないわよ」

妻「じゃ、なに、仕事場に持っていって、持って帰ってきたってこと」

夫「いや、持っていったっていうか、入ってたんだから。」

夫「だから、ま、拾ったんだな、ソファーの下だったと思うんだけど」

妻「指に、挟んでみたりしなかった」

夫「え」

妻「ほっぺたで、いたたたっとか」

夫「しなかった」

妻「鼻には」

夫「しないよ」

妻「そうか」

夫「だから、あるって知らなかったんだから」

妻「ああ、そうか」

夫「でも、ポケットにはあったんだけど」

妻「ああ、そうか、そうよね」

38

居間。

息子「給食費、払った？」

母「……今日、ホームレスに会ったわ」

息子「え、どこで」

母「地下鉄に乗ってた。服もちゃんとしてたし、臭いもしなかった。だけど、その人がホームレスであることは、私にはわかった」

息子「どうして」

母「顔よ」

息子「顔？、なんでそんなの顔でわかるの」

母「その人は、顔がホームレスの顔してた」

息子「どこが違うの、ホームレスの顔とそうでない顔とは」

母「どこが、というのはわからなかったけど」

母「私はこう思うのよ。家がその人の顔をつくるって。名前もそう。仕事もそうかもしれない。家、名前、職業、それが、その人の顔の形をつくってしまう。ホームレスにはそれがない。むき出しの顔。というか、むしろそれは、人間の顔じゃないってことなのかもしれない。住む家がないってことは、その人に顔がないってことなのかもしれない」

息子「……まだ、給食費の入金がないって、先生に言われたんだけど」

母「私は、顔がないのは困るけど、ある、って言うのも考えようによっては、恐ろしいことだと思う。顔なしじゃなくって、顔あり。顔という履歴書。いや、履歴書が張り付いて、人間の顔になる。だから社会的な来歴のない顔は、よく見えない。不確かで判然としない。そんな、見えない顔に私は地下鉄の中で出会ってしまった……」

息子「母さん、ねえ、母さん、給食費。どうしたらいいんだよ」

39

男のモノローグ

「失業した父は、毎日決まって10時に起き、遅い朝食をとり、身支度をし、職探しにでかける。日が沈む頃には帰ってくる父の手には、石、流木、機械の部品などが握られている。職を探しに出てガラクタを見つけて来るんじゃ困ったものだ。父はよく、このあたりは昔、海辺だった。だから、世界の果てからたくさんのものが漂着するのだと言っていた。父が拾って来たものをリストにすると、こんな感じだ。ウスバカゲロウに張り付いたマイルドセブン。木切れの切れ端が熊のぬいぐるみを貫いてる。とらえきれない量の海水を含んだコンドーム。猫の死骸。こしくだけになったお相撲さんの写真。いきものがかりのCD。かわうそ。ひなたにあったような壁の一部。小鳥。揚げ物用の皿。投身大の八代亜紀。くつひも。韓国のコーラ。よそ行きの服。帽子。網にからまった洗剤容器。夾竹桃の造花。誰もいない庭。アスファルトの思い出。各国のチャイナタウンを食べ歩いたと自慢したバックパッカーの領収書。汗をかいたビール瓶。おどけた仕草をして立ち去ったとき、背後から視線を感じて、ぞくっとしたこと。ホテルの部屋。雨漏り。海底地震。穴のあいたポリバケツ。三種混合ワクチン。昨日という日。夕日。海に沈む。バレーボール。赤い靴。キネマ旬報。秋田犬。割れた電球。腕時計をしたまま切断された手首。下総の国。つぶやいてる鳩山首相の嘘。ロボット演劇。別荘の屋根。明らかに捨て子。ラブレターの下書き。錆びた包丁。妻の顔。うどんめぐり。誤植のゆるキャラめくり。マルキドサドのおなら。まな板。え、これ、ほんまに、ええ、なんか、ええのん、こんなん、って思うほどに荷造りの整った旅行鞄。割れ物。ジェームズと書いた名札。鏡。鏡餅。遠浅な海。飛び込み台。海老。海老ぞり。ひげそり。同居人。なんか、付き合ってる人がいて、なおかつ、一緒に住んでたりするとその人のことをよく同居人って言う人いるけれど、あれは自分の彼氏とか彼女とかのことで、ある意味、夜とかに性交渉もするわけだから、同居人っていう字面よりもめっちゃスケベな感触があると気づいた日。恥じらい。気の乗らないセックス。ラテックス製人工ペニス。耐えられないイビキ。あああああんって叫んだ。ざけんな、って言った。北京五輪。ママチャリ。おかあさん。おかーさーん。歯ブラシ。切手。マスク。あばら骨。海底トンネル。助産婦さん。助産婦サーン。オーデコロンの容器。その残り香。うんこつき人工肛門。永遠の受験戦争。少女誘拐の記事つき新聞紙。歴史的ザーメン。そのようにして、繰り広げられた六日間戦争の顛末が書かれた本。神話。灯台守の宿命の家系図。東京砂漠のEP版レコード。鼻毛。かかと。鰹節。岡田ジャパン。」

40

ある一時期だけつけていた日記

「今日は、テルアビブの南にあるヤッフォーという港町に行った。イスラエル建国前はアラブ人の古い街だった。そこでは毎週蚤の市がある。一軒の骨董屋に入り、絵葉書を数枚買った。それらはすべてもうすでに誰かに宛てて書かれたものであった。写真に写っているのは、アルプスの山間のホテル、エビアンという街にある湖、どこかわからないがリゾート地でくつろぐ人、お城のような家、ヘルシンキの港を行くヨット、など。どの風景も私には初めて見るものばかりである。どういういきさつでその店にあったのかわからないが、そこに行かなければ、それらの風景と出会うこともなかったろうし、今、それらの葉書が私の手元にあるということが、どうにも不思議でならない。もとの宛先とは違う、まったく思いもしない場所に届けられたのである。勘定を払うとき、店の主人がおまえは何人かと聞くので、日本人だと言うと、おまけに一枚の絵葉書をくれた。それは、１９２５年に、大阪からギリシャのサロニキに宛てて出されたものであった。大和、談山神社の十三の塔が赤くあざやかに描かれている。これもまた、不覚にも私には初めての風景であった」

41

家。虫の声。

母「どうしたの」

父「……虫の声がする」

虫の声。

母「あ、なに、これ」

姉「どうしたの」

母「虫が鳴いてるのよ」

虫の声

姉「わ、すごい。どこ」

父「家の中だとは思うんだけど」

姉「……コオロギ？」

母「コオロギって、こんなふうに鳴くの？」

姉「鈴虫？」

母「……鈴虫って、なんだっけ、鳴き声忘れた」

姉「クツワムシとか」

母「ぎーっちょんって鳴くのいなかった？」

姉「なにそれ」

父「メスを呼んでるのかな」

姉「じゃ、家の中にいちゃだめじゃない」

しばらく、鳴かない。

と、鳴く。

父「あれ、……網戸のところだ。たぶん」

みな、そこに集まる。

やがて、虫の声。弟もいる。

母「あ。……いい音色ね」

姉「かわいい。キンキンキンキンキン」

弟「カネタタキだね」

一同「へー」

弟「鳴き声のわりにちっちゃなやつだよ。そのうち、どっか行くと思う」

カネタタキの鳴き声。

42

歴史の天使が夕暮れのベランダにいる。

天使１「遠くにいる友だちからメールがきたわ。人身事故の知らせが来て電車がこない。駅員が拡声器に叫んでる。電車は来ずに電光掲示板には事故のお知らせ。なんだか駅の構内全体が浮足だって、私は涙がとまらない。事故で息をとめたひとの波が押し寄せて、駅やみんなもうきあしだったのだ。ちょっと。ちょっとだけ、しばらくしたらまた元どおり」

天使２「今日はよく見える、遠くの方まで」

天使１「感傷的になるべきじゃない。一人の死を都市の喧噪のなかでみつけたオアシスのように解釈している。そんな風に人身事故の死者を扱うのは生きている人間の側の不遜な態度じゃないかしら」

天使２「たった一人の死であってもなにかに影響をあたえるってことよ」

天使１「キリスト教だってイエスの死を復活の物語にしたから、堕落したんだわ。ただ死んでそれでおしまい、そうであればよかったのに、そうであるからこそ、その人の死も、イエスの死も尊いのよ。何かに都合良くつなげないでほしい」

天使２「一人のさみしさにすでにもう感傷が差し挟まれてるってことなの？」

天使１「都会の物語よ。誰かが、孤独にさえ深みがあるごとくに喧伝するんだわ。のっぺらぼうに一人ってことなのに」

天使２「誰よ誰かって」

天使１「父と子と精霊になんてわけなきゃいいのにややこしい。というか単純に人間の尺度にあわせたってわけよ。人間の自意識に。息子は自意識持っちゃった。死ぬ前に苦悩したりして。知らないわよ。他人のことなんて。でも、他者の存在への同情でもって、自己を他者から成り立たせようとしたのよ。つまり、自己と他者の出現ゆえに、そういう語り口を必要としたのね。苦悩なんて知ったこっちゃないのに。そういう伝達手段がないと、納得できなくなったのよ」

天使２「自己自身に慇懃無礼になってるってこと？」

天使１「自分自身を風景化するのよ。窓に映る孤独に酔うようにして」

天使２「で、死んだあとにもその人の死の物語が待ち受けているってことね」

天使１「伝染してるんだわ。それが。人々ひとりひとりに、無意識のうちに夢を媒介にして。」

天使２「自己の拡散があるってことかな」

天使１「そのひとの一人分をそのひとだけにとどめておきたい」

天使２「そうね、そうしてあげたいわ」

天使１「そうでしょ、そう思うでしょ」

天使２「あ、そこにいる人。……あなた。あなたよ、あなた。ちょっといいですか。ここはベッドです。ここに寝てください。……あなたは自殺した。アパートのバルコニーから転落して。だから、頭に傷がある。でも、とても美しい顔が損なわれるほどではない。葬儀が始まるまで、ここに寝かせられることになった。質屋の夫は死んだ妻のこと語る。そのベッドのすぐわきで。年老いたお手伝いさんもいて、そう、その人に語っているというより、自分自身にむけて、どうして妻にこんな不幸が訪れてしまったのか、反省するように、二人の出会いから、ちょっとした諍いのこと、二人ではじめて映画を見に行った日のこと。でも、どうしても自殺の意味はわからない」

天使１「それなに、映画？」

天使２「そう、昔、観た。女の人の足先が、ベッドから少し出てるのよ。はっとして、私、そこだけ生きているような気がしてならなかったわ」

43

目蓋の写真。

暗い部屋。

ソファーの女。

女「この家のベランダからは新幹線が見えます。北の町へ行く。空の明るさを背にして、それは日を浴びて走っていきます。それをじっと見つめて、こうして目を閉じ、目蓋を手でおさえると真っ暗な中に新幹線の影が見えるんです。まるで焼き付けられた写真のように。でも、手に取れる一枚の写真じゃなくって、それは私の中だけにある。ほかのものを見てしまうと消えそうだから、ほかを見ないように、ほかが見えないようにして、私はここにいます。でも、もう限界。たったいま、暗闇になりました。……これを発見してからというもの、私、こんなことをよくやります。目によく焼き付けてぱっと手で目蓋を押さえるんです。ぎゅっと。……すると写ってます。日向の外の光景が」

44

絵画について。

リビング。

娘「あれ、これ、持って行かないの」

母「ええ？」

娘「この絵。リビングの」

母「ああ。うん。……前から、ここにあったみたいよ」

娘「え、あ、そうなの。てっきり、私、お父さんが買って来たんだと思ってた」

母「ここに引っ越して来る前から、あったのよ」

娘「へー」

娘「私、この絵好きだったのに。……なんか、昔、行った、おばあちゃんの家の前に似てるでしょ」

母「ああ。……鹿児島の」

娘「うん。……この木の感じとか」

母「ああ。……教会はなかったけど」

娘「……え、じゃ、これ、どこなの」

母「あ。……どこなんだろ」

娘「え、私、おばあちゃんちってばかり、思い込んでた。そんなはずないのに」

母「そうね」

娘「じゃ、お母さんは、ずっと、そうじゃないって思ってたの？」

母「いや、とくにそんな、どこって思ったことなかったけど。」

娘「そうか。……私だけか、……」

母、引っ越しの片付けをしながら。

母「持って行く？その絵も」

娘「ええ。……いいわよ。そんな」

母「持って行ったって、もう、誰も文句言わないとおもうけど」

娘「……置いとこうよ」

45

家の至るところに発生する原因不明の水溜まりについて。

母「あら、ここにも、どうしてこんなところに水が溜まってるのかしら」

母「拭いても拭いても、きりがないわ」

母「また、こんなところに。……どっかから、水が入って来るのかしら」

母「雨だってずっと、ここのところ、降ってないのに」

母「（笑う）……幸一のおしっこ、もらしたあとみたい……」

母「……拭いても拭いても、水が溜まる。……気がつくと、水たまり。……それも、いつも同じ量。……子供の、おしっこと同じ量。……昔、お母さんが教えてくれた、母親がお産のときに流す泪は、赤ん坊の一回分のおしっこと一緒だって」

母「……水がたまる、水がたまる。私の水ではありません。……水がたまる、水がたまる。この家の水がたまる。……やがて、腐って、家ごと水になる」

母「……あら、また、水が来てる。……こんな水たまりを見ていると、昔、私のお母さんが、よく近所のおじさんのことを話していたのを思い出す。そのおじさんは、十二指腸潰瘍の手術をして、その傷跡から水が漏れるので、そのおじさんの帰って行ったあとには、よく、水たまりができていたらしい。畳を濡らすので、そのおじさん用の座布団があった。」

母「この水たまりのこと、誰にも言ってない。夫にも、子供たちにも。……私だけの秘密。」

母「……私、気づいてしまった。……私が、ふと、昔のことを思い出す。……その度ごとに、この水たまりは出来るんだって。……私、気付いてしまった。そう、さっきも私、思い出した。……むかし、むかし、私が生まれた、田舎の家で、鳩を飼ってたって。……そしたら、ここに、水たまりが、あった」